

研究の経過と概要

1 研究主題 豊かで創造的なゆとりある教育課程の編成と実践

2 主題設定の理由

今、子どもたちの学力向上に対する期待が、学校内外から広く求められている。私たちは、「子どもたちに本当につけさせたい学力」とは何かをあらためて問い直し、自主創造的な教育実践を積み重ねることによって、これらの声に対する結果を出していかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために、質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは、私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ、教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え、カリキュラムや授業プランを工夫して、その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子どもたちに、学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために、日々、目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本部会ではこれまでに、主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。部会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い、総合的な学習の時間における指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。新学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されているが、時間数が削減された総合的な学習の時間においては、各教科で学んだ知識や能力を活かすことによってその成果を高めることが期待されている。そこで本部会においては、総合的な学習の時間だけにこだわらずに他の教科での実践も視野に入れ、自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め、検証結果を日常実践に還元していくことを目指してきている。

授業実践においては、多角的な視点を持って教材や単元を分析しながら、「どのように教えたらよいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし、定められた指導計画によるものではなく、「教科書“で”教える。」という意識を大切にしながら、自主創造的な学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために、次の3つの視点を重視して、成果の検証にあたる。

- (1) 授業（単元）における、「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。
- (2) 授業（単元）において、授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作り直した点はどこか。」を明らかにする。
- (3) 授業（単元）のふり返りや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては、授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と、児童のノート・作品・間奏記述等を、時間をかけて多角的に分析していくことによって、子どもの変容をみとり、成果と課題をあきらかにしたい。

本部会としては全ての子供たちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫とすべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって、結果として子どもの学力の向上につながるように、内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

3 報告書作成参加者

石井美保 田邊章子（山梨北中） 金井 毅（山梨南中） 山縣重人（東雲小）
伊藤淳司 小椋規雄（塩山南小） 平山直樹 天野秀太郎（勝沼中）
古屋宏記（松里小教頭）

第6学年総合的な学習授業案

授業者 山縣 重人

1. 単元名 戦争から平和への歩みを見直そう

2. 単元設定の理由

太平洋戦争が終わってからすでに70年、教師も父母も戦争を知らない世代になっている。70年間という平和な月日は、戦争当事国であった日本に戦争の記憶を風化させつつあり、今では戦争についてマスメディアも含めて強く語られるのは8月の数日間だけというのが現状であろう。

しかし、イスラム国問題、パレスチナ問題など、人々の間に争いがあることは疑いのような事実である。戦いの映像もニュースなどを通じ、否応なしに目に飛び込んでくる。そのような中、これからをになう子どもたちに日本の戦争経験の学習を通して平和を愛する心を伝えていくことは、私たち大人にとって重大な責任である。

6年生の子どもたちは「戦争はこわい」と強く思っている。それは、国語の物語文「ちいちゃんのかげおくり」や「一つの花」の学習で、太平洋戦争の時代の、国内の大変な生活のことを、配給、爆弾、空襲といった言葉を理解しながら、しっかり学習してきたからと考えられる。

そこで、この学習は社会科の学習と関係づけ、歴史の流れの中で、戦争までの歩みや当時の世界の様子を学習し、持っている知識を日本史の一部としてとらえさせ、客観的に戦争への歩みをとらえさせていきたい。

調べ学習については、昨年度、環境調べや仕事調べを行い、まとめたものを子どもたちが互いに読み合う活動をしている。そこで本単元でも戦争に関することで興味を持ったことをテーマとして調べ、まとめたものを交流させ、さらに知識を広げたい。

さらに、特攻を扱った絵本「二十六夜まいり」、マレーシアの教科書を訳した「私たちの国にきた日本兵」などの本や資料を効果的に使い、戦争の恐ろしさをただ「こわい」「かわいそう」「今の時代じゃなくてよかった」ととらえるのではなく、「争いは自分のことしか考えられなくする。心をくるわせる。」ことが怖いということにも気づかせていきたい。

3. 児童の実態

男子17名、女子15名、計32名のクラスである。担任は6年からの担任である。男女の仲はよいが、おたがいを意識している様子も見受けられる。

当初は、学習になかなか取り組めない子どもが数名いて、声をかけないとそのままですます様子が見られた。しかし、女子を中心に、いろいろなことに興味を持って意欲的に活動できる子どもが多い。学習中の挙手は「分かっているけどまぢがえると恥ずかしい」という気持ちから少ないため、こちらから指名することが多い。しかし、指名するとほとんどの児童が何かしら答えることができる。意見、感想については、ノートなどに書いてから発言する子が半数ほどいるが、考えたことをそのまま話すことができる子もいる。

4. 単元のねらい

- ① 戦争の経緯やそれが拡大していく状況、被害の大きさなどから、戦争の悲惨さや日本とアジアの関わりについて考えるとともに、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たすようになってきたころの様子と人々の暮らしについて理解と関心を深める。〔知識、理解〕

- ② 戦争被害に関わる調べ学習を行い、見つけた歴史的諸資料を活用したり、戦争に関する本や資料などを通じて、当時の生活の様子をまとめたりするとともに感想なども記し、具体的事実について論理的、感性的にとらえる。〔資料活用、観察〕
- ③ 争いがいかに人々を狂わせ、人権を無視することにつながるのか考え、平和を大切にする心の尊さ、命の尊さを様々な人の立場から理解する。〔思考、判断〕
- ④ 多くの資料にふれ、調べ学習を行うことによって、当時の社会と人々の暮らしについて興味関心を深めることができるようにする。〔興味、関心〕

5. 本時の活動

(1) 日時 平成27年11月25日(水)

(2) 場所 奥野田小学校 6年教室

(3) ねらい

学習したことや資料をもとに、戦争がいかに人間性を失わせるかについて考えを深めることができる。

(4) 展開

	児童の活動	教師の働きかけ	評価
ふり返る 10	①学習してきたことをふり返る。 当時は何が大切だったのか考えを発表する。	ポートフォリオ⑦を見返す。 ・食料 ・命 ・家族 ・笑顔 ・自然・兵隊(お国のためと言っているから) ・戦果をあげること	
課題をとらえる 10	②「私たちの国にきた日本兵」の感想を発表する。 ・日本兵が罪のない人たちを殺しているぞんごく。 ・他の国の人にこんなひどいことをしていたとは思わなかった。 ・子どもたちは食べ物がなくてかわいそう。 ・間違っていると思う。 ・なぜやさしくできなかったのか不思議に思った。	「私たちの国にきた日本兵」の感想を発表しよう。 マレーシアの立場としての話だと言うことを話しておく。 「かわいそう」「ひどい」「こわい」などの感想を板書する。 「なぜこんなことをしたのか。」という感想が出てこない時は、以前の授業で出された感想を黒板に貼り、読む。	【行動観察・記述分析】 B資料を読んで思ったことを表現できる。
追求する	③課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">なぜ助けてあげる心を持たなかったのか、なぜやさしくしなかったのか考えてみよう。</div>		

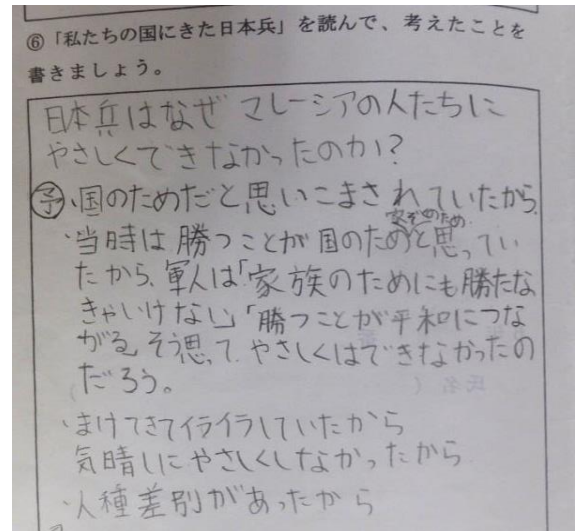
<p>5</p> <p>深</p> <p>10</p> <p>ま</p> <p>と</p> <p>め</p> <p>る</p> <p>10</p>	<p>・自分かやられるかもしれないから優しくできない。</p> <p>・命令だからしなければならない。</p> <p>・見せしめで言うことを聞かせるためにした。</p> <p>・仲間のためにした。</p> <p>④新聞記事の資料を読み、それをもとに考える。</p> <p>・戦場では自分を守ることしか考えられなくなる。</p> <p>・戦争は人をくるわせる。</p> <p>⑤ポートフォリオ⑥分かったことに書くとき、思ったこと、考えたことを書き加める。</p> <p>⑥次時の予告</p>	<p>調べてきたこと、学習したことでは答えられないので、難しい。考えが出てこない時は新聞記事の資料に進む。</p> <p>小グループで話す。</p> <p>発表する。</p>	<p>【行動観察・記述分析】</p> <p>B新聞記事の資料を読んで考え表現する。</p>
---	--	---	---

(5) 授業者の反省

- ・自分の思いが強すぎて教師主導の授業になってしまった。特に資料の説明のところは話すことが多くなってしまっていた。読み取りのヒントも示したが、そこではそうせずに、大きくずれてしまっても子どもたちなりに読み取ったことを話すような活動を入れ、もう少し子どもたちの思いを共有できるように話し合う時間をつくる必要があった。
- ・宿題として書かせた「私たちの国に来た日本兵」の感想を何人かに発表させるのではなく、隣同士やグループで交流させてから始める展開を考えてみてもよかった。
- ・「戦争と平和」を子どもたちの身近なところに結びつけるのではなく、戦争のむごさや悲惨さを印象に残したいと思っていた。だから「けんか」「暴力」とは結びつけようとは思わなかったが、小学生の授業ということを考えると身近なところに持っていってもよかったのかとも考えている。
- ・深めるというところは、課題の難しさもあり、深められなかった。

(6) 研究討議から

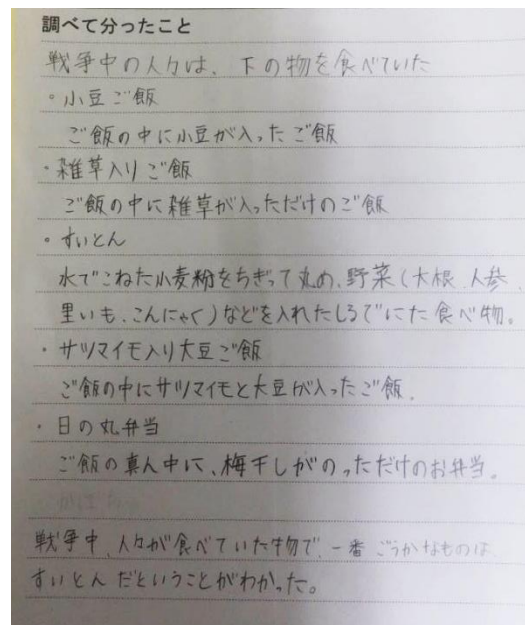
- ・難しい課題だったが、それなりによくみんな考えて書いていた。よく集中していた。
- ・考えの交流もできていたが、難しい内容だったと思う。



6. 学習を通して

子どもたちは、当初、戦争について、死、ざんこく、こわい、空襲、悲しい、してはいけないことなどと今まで教科や道徳、テレビなどの日常生活でなどで学んできたことをもとに考えあげていた。そこで、まず社会の時間に教科書を使って学習し、戦争がどのようにして始まり広がっていったか、人々の生活はどうだったか、どう戦争は終結したかという歴史的な流れについて理解していった。満州については、ほとんどの子どもが「戦争になるからダメ」という考えを述べる中、「日本の生活がよくなるから土地を広げて食料を作るという考えは仕方がない。」と考えた子どもがいた。しかし、そういう子どもも「戦争になるのは反対。」であった。

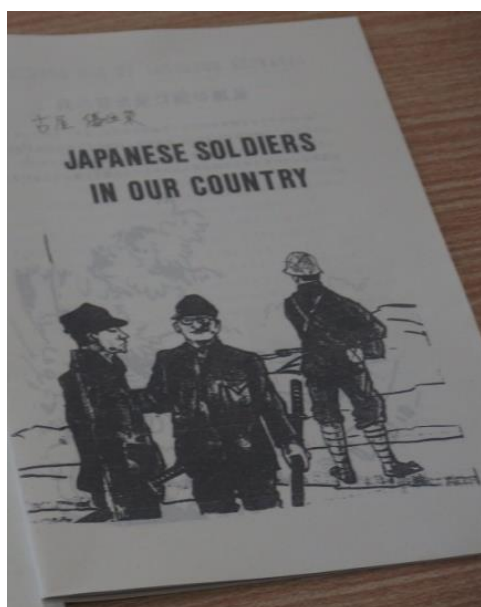
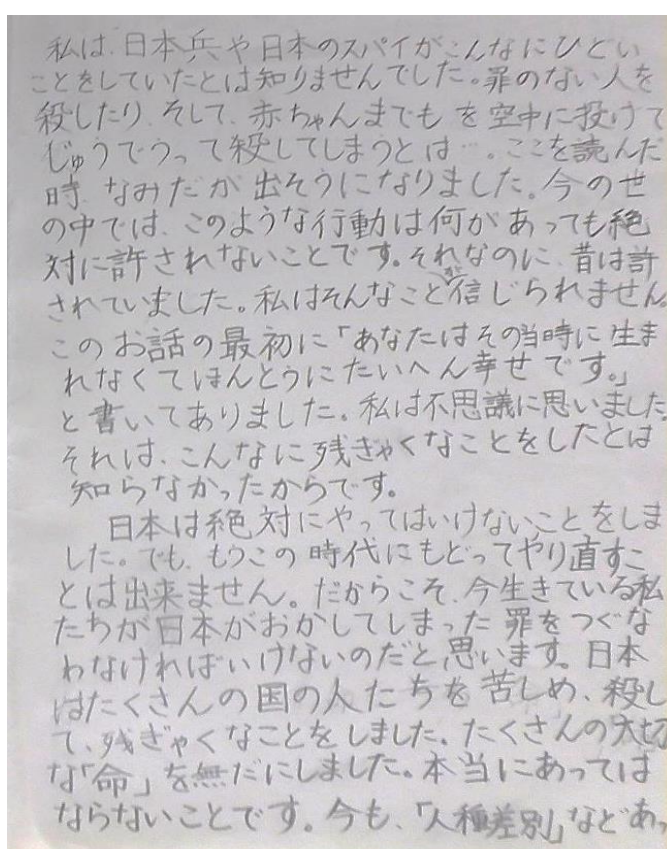
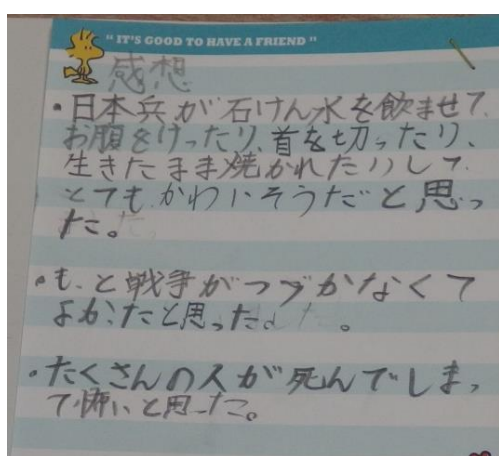
調べ学習の課題については戦争をキーワードにウェビングを行い、それを黒板でまとめてから題材を選んでいった。活動は個々で行



い、調べたことと感想をプリントにまとめ、大型テレビに映して読みあった。題材は「山梨の空襲」「戦争中の生活」「原爆の被害」などが多かった。発表後の感想には、「山梨でも被害が大きくて驚いた。」「原爆は熱風が1000度以上あったことに驚いた。」「ネズミやカエルも食料にしようとしていたことに驚いた。」という感想が多かった。

特攻を扱った絵本「二十六夜まいり」の読み聞かせでは真剣に聞いていた様子が子どもたちの感想からうかがえた。「3人のお兄さんたちが特攻兵だったのがかわいそうだった。」「十八才という若さで兵士になるのがかわいそうだった。」「ちいちゃんとおかあさんが花をつみにいってお兄さんたちに上げるところがかわいそうだった。」といった感想を持つ子どもがいた。

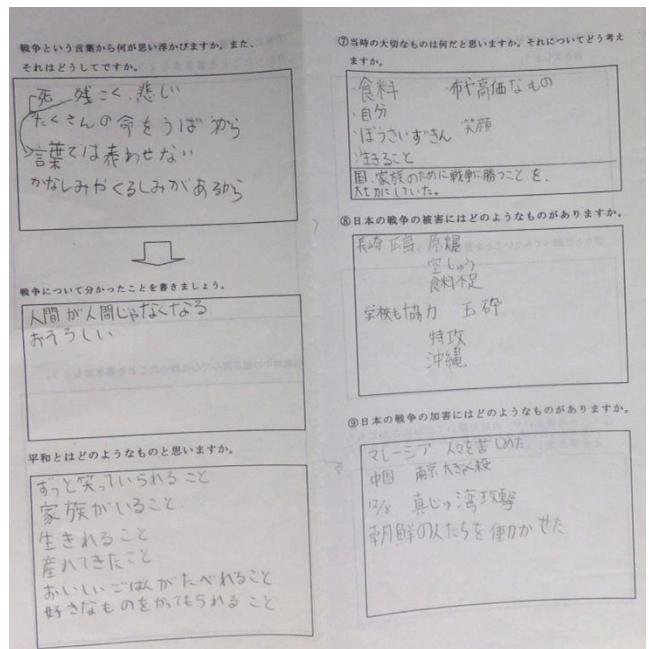
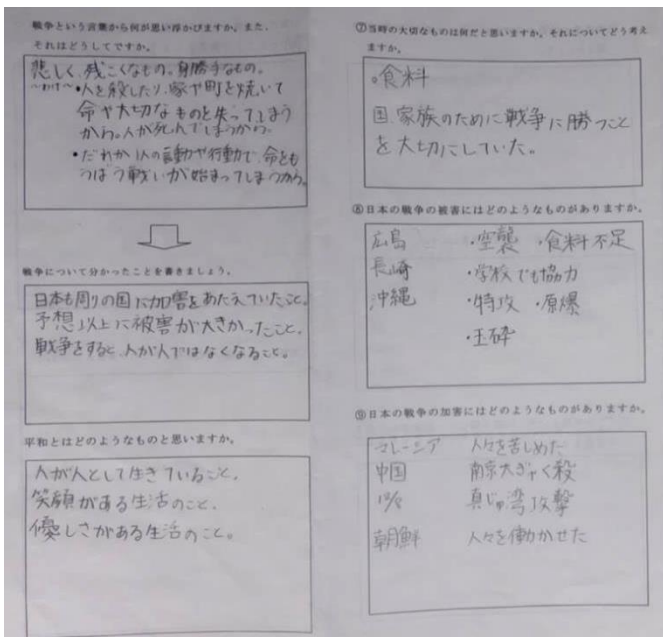
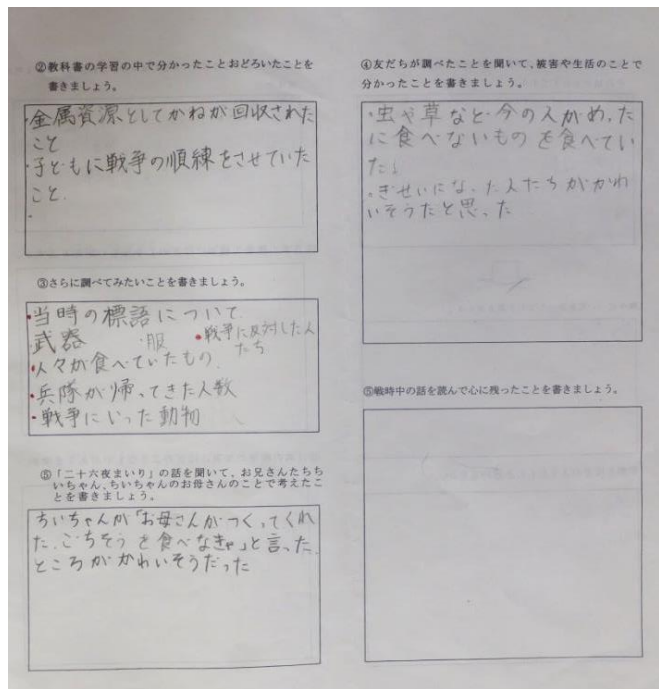
「私たちの国に来た日本兵」は子どもたちにとって衝撃的な内容だったようだ。「あくまでもマレーシアの立場だからすべてが正しく書かれているとは限らない。」と話したが、日本軍の加害について、残酷に書いてあるのでそれに対する批判的な感想が多かった。



一連の授業の最後に行った「戦争について分かったことを書きましよう。」では、「人が人じゃなくなるから恐ろしい。」「日本もひどいことをした。」「人は生きるためなら何でもするのだと思った。」「とても怖くてざんこくなことだと分かった。」「食料不足だったことが分かった。」「絶対にしてはいけない。」「みんな自分のことしか考えなくなる。」

「多くの人々が苦しんだ。」などと初めに比べて、より怖さや悲惨さを理解していた。

また最後の、「平和とはどのようなものか」では、「戦争がなく、人と助け合えること」「国民がふつうに暮らすこと」「笑顔がある生活のこと」「おいしいごはんが食べられること」「好きなものを買ってもらえること」といった意見がたくさん出てきた。「戦いがない」とか「だれも死なない」ということは、特別なことではなく、ふつうの毎日の楽しい生活のことであり、その中にこそ平和があるのだということをも多くの子どもたちは感じていたようである。



7 終わりに

最後の社会科の授業で、1年間学習したことの振り返りを行った。日本の歴史や憲法や世界の学習について、いくつか質問したり、覚えていることを発表させたりした。その後、2学期の平和学習についても使用した資料等を見せながら振り返った。そして、「平和のために、自分がこれからできそうなこと」を箇条書きで書くように指示し、発表させた。

- ・ 外国と交流する。
- ・ 人種差別をしない。どの国とも平等につきあう。
- ・ みんなで助け合う。弱い国を責めない。理解し合う。
- ・ 政治に参加する。選挙をしっかりとる。日本をよくしてくれる人を国会議員に選ぶ。
- ・ 戦争をしやうと思わない。

- ・ 募金をする。ボランティア活動をする。

社会科の最後に、「お互いを尊重し、理解し合うことが大切である。」と書いてあったので、そこから考える子どもが多かった。「戦争をしようとは思わない。」は「少しでも思っていたらするかも知れないから。」という理由であった。また、「政治に参加する。」等は、選挙権が18才から与えられるということを知っている子どもから出されたものである。なかなか考えつかなかった子どもには、「友だちの発表を聞いて、自分がそうだなと思うことをノートに書きなさい。」と指示したところ、「外国と交流する。」「政治に参加する。」を書いてきた。2学期の学習が、社会科の学習にもつながっていると感じられた。今回の平和学習が、今後、子どもたちが平和について考えるとき、何かの視点になってくれることを願っている。

【参考資料】

「二十六夜参り」 武田鉄矢 「私たちの国にきた日本兵」 「動員学校報国隊」
2015年6月27日朝日新聞「獄中で気づいた戦争の実情」

本時で使用した新聞記事

2013年7月31日（水）朝日新聞「おびやかされている平和ささえる」

（前略）毎年、夏が訪れるころ、潮平正道さん（80）はこの場所で地元の小中学生らに体験を語る。（略）

6月になり、潮平さんら住民は、島の山間部に避難するよう日本軍から命令された。住民が米軍の捕りよになるのを恐れたため、とされる。だが、そこはマラリアをもった蚊が飛ぶ地帯。

（略）40度を超す高熱で人が次々に倒れた。薬はなかった。むしろでつつんだ遺体を親やきょうだいが背負っていった。石垣島を含む八重山諸島で3600人あまりが命を落とした。結局、米軍は島に上陸しなかった。

「戦後、沖縄に派遣された将校の宿舎の押し入れから、マラリアの薬が見つかったんだ。子どもたちの前で話す潮平さんがいた。

「ずるい」と声があがる。潮平さんは答える。「生きて自分の家に帰りたい将校の立場だったら、私も同じことをしたかもしれない」

「誰が悪いんだろうね」。沈もくの後、「戦争が悪い」と返ってくる。

戦場では、自分を守ることしか考えられなくなることを伝えたかった。

知らぬ間に「お国のため」の意識が植え付けられていった先にざんこくな現実があった。

本時以外で紹介した新聞記事【戦後70年】「沖縄戦」語り継ぐ 読売新聞 2015年5月25日

「死んだ方が楽。そう思っても、手りゅう弾は怖くて使えなかったですよ」

沖縄本島南部、糸満市の「ガマ」と呼ばれる自然壕ごうの中に、中山きくさんの声が響いた。学生に当時の様子を説明するため、同級生が亡くなった壕の中に入る中山さん。「生きるための黒糖と、死ぬための手りゅう弾を、背中のかばんにいつも忍ばせていました」

中山さんは太平洋戦争末期の沖縄戦で、傷病兵の看護などにあたった「白梅学徒隊」の元学徒。「白梅」は沖縄県立第二高等女学校（当時）の4年生56人で編成され、激戦の中で22人が亡くなった。（略） 「壕の中で同級生6人が毒を飲んで自決しました」「近くでは、4人が米軍の火炎放射などで命を落としました」。切々とした口調で語られる過酷な体験に、学生らは息をのんで聞き入った。（略）